

北海道大学

古座川町と北海道大学和歌山研究林との包括連携協定

北海道大学和歌山研究林と古座川町は7月27日に包括連携協定を締結した。学術や教育、文化、地域振興などで協力し、互いの発展や充実を目指すものである。

和歌山研究林は大正14年(1925年)に旧七川村から広さ427haの森林を購入して設立された。旧北海道帝国大学和歌山演習林を起点としている。大半はスギ、ヒノキの人工林だが、一部には自然林も残っている。本館は昭和2年(1927年)に完成し、平成25年(2013年)に国の有形文化財となった。大学生や研究者の教育や研究の場としての活用だけでなく、地元の小・中学生や住民らへ自然体験学習などの機会提供にも取り組んでいる。同町の地域関係では古座中生徒の森林学習の受け入れ、ふれあいサマーキャンプへの体験提供など地域貢献も果たし続けている。

このたびの包括連携協定を結ぶことで、和歌山研究林としては研究林の利用の幅をさらに広げ、古座川町の豊かな自然を使った教育サービスを充実させ、交流の輪を広げて、地域を基盤とした自然体験学習を推進したいと考えている。その第一弾として「親子木工教室」と「森のたんけん隊」の2つの公開講座を共催で行なった。



写真1. 包括連携の協定書に調印した西前啓市町長(右)と和歌山研究林長の中村誠宏准教授(左)

この協定の締結記念講演が8月8日に同町中央公民館で行われた。北大北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション長の日浦勉教授が「長い目で見ると、広い目で見ると日本の森」と演題を掲げて登壇し、他のスギ林と比較した場合のヨシノスギ林の特性や気候変動と森林の関係

などの研究事例を紹介しながら、同ステーションのこれから目指すところを語った。和歌山研究林長の中村誠宏准教授が「和歌山研究林って、どんなこと？」を演題に掲げ、同研究林の概要と設置に至った経緯やスギ・ヒノキ林の拡大造林や収益事業などの沿革を説明した。現在は研究と教育の二つの機能を柱にして、さまざまな機会を提供していることを報告した。この講演会には約 70 人の町民が訪れ、同研究林への理解を一層深める機会となった。



写真 2. 和歌山研究林の沿革などを語る中村誠宏林長